

---

# 魂の謳歌

クロクロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂の謳歌

### 【Nコード】

N2987D

### 【作者名】

クロクロ

### 【あらすじ】

才能と素質2つを持ち合わせる人々の戦い

最初に・・・

人には皆、才能 と 素質 がある

才能は もってながらにある力  
素質は 高められる力

人はだれしも、この二つを持っている

才能を持っていて、さらにその才能の素質を高めると、それは一般人を超越した者になる  
それらをいわゆる 仙人・超人 というのだ

生き物には必ず才能がある

それを 引き出すこと・見つけ出すこと が肝心なのである  
見つけ出すことにより、自覚としての 力 が湧いてくる

たとえば 走ることに才能のある馬が2頭いる  
1頭は自分の才能に気づいている  
もう1頭は自分の才能に気づいていない

この場合、気づいているほうの馬がはやく走れるのである

もしこの気づいている馬が走りの素質を持っていて高めたらどうなるか・・・？  
さらに加速し、自覚としての 力 より、さらに強い 力 を手に入れるのかもしれない

これは人や生き物が一生で気づくことができるのは難しい事なのである

キツカケ があり そこから学び 強くなる

しかし必ずしも 同じ 才能と素質 を持ち合わせつ事はない

つまり 力を手に入れることのできるのは 幸運であり 自覚のある 者だけなのだ

## 赤木連 1

1988年10月2日

赤木家の長男として生まれた赤木連<sup>アカギレン</sup>

赤木家として長男の誕生はとても喜ばしい事であった  
両親は連を可愛がり、愛した

1993年

連が5歳の時、妹が生まれた  
両親は妹をかわいがった  
何事も、妹を優先するようになった

おもちゃの取り合いでも、  
「あなたはお兄ちゃんなんだから」  
と、あきらめざるおえなかった

反抗すると、叱られた

連からしてみれば邪魔な存在だった

自分の居場所がいなくなるようで怖かった  
もしかして妹に全て奪われるのではないか……？  
そんな恐怖の気持ちがあった

1995年2月10日

連が7歳の時、事件は起きた

連が誕生日に買ってもらった、戦隊ヒーローの人形を妹が壊してしまった

連は妹に対する 怒り はわかなかった  
ただ、 恨み がわいた

反抗しても無駄だということは連自身が一番よくわかっている  
妹が優遇 優先されるのだから・・・

連は思った

妹が消えてほしい

そう願った

連はリビングのテレビの前で遊んでいる妹を睨みつけそう願った  
次の瞬間、妹はテレビの下敷きになった

連の目の前に赤い、すこし濁っている水が飛び散った

恐怖は感じなかった

ただ 震えがとまらなかった

テレビはブラウンの大型で、2歳の妹など体全体がすっぽり埋まっ  
てしまう

テレビの枠には血がついて、垂れている

赤木家は深く悲しんだ

連は無表情で妹の葬式を過ごした

連はこの事件以来、自分は神と思い込むようになる  
連自身、自分の不思議な 力 に気づいたのだった

## 秋川千里 1

1990年3月16日

大きな屋敷に小さな女の子が生まれた

アキガワ センリ  
秋川千里

千里は小柄ではあったが、気の強い性格だった

秋川グループの社長令嬢であつたため、

英才教育・習い事等、スパルタの教育を受けていた

千里は自分が期待されていることを自覚していた  
(わたしは秋川グループのトップにならないといけない)

千里が5歳の頃 1995年2月3日

千里の両親が旅行に出かけた

両親が旅行から帰るとき、大吹雪で飛行機がでず、帰れなくなった。

千里に勉強を教えている二人の男の教師は、

両親から大吹雪で帰れないので子守りをしてくれと言われていたので、千里の英語の勉強をさせていた

教師は千里に英語を教えていき、それを千里は理解する

教師が勉強を教えているとき、それは起こった

千里の勉強部屋の扉の奥から大きな雑音と何かが壊れたような音がした

千里は一瞬ビクツと体をたてて、後ろの廊下へと続く扉をみた

教師の一人は様子を見にイスから立ち上がった  
もう一人の教師は千里に

「ここをやって」

と教科書のページの問題文のところを指で沿った

ツカツカと扉の方へあるいていく教師の足音が後ろから聞こえる

次の瞬間、ババババババというすさまじい音が部屋中に響く

びつくりして声をあげようとした

しかし、あげるまえにあるモノをみた  
ぐったり倒れた二人の教師の姿だった

体にはビッシリ弾丸の跡がのこっている

血が吹き出ている

声がでない　だせない　動けない

穴だらけになっている扉の方に目をやる

武装をした男達がズカズカと入り込んできた  
銃をもっている

「こいつか」

「ちゃんと中を見て打て。死んだらどうする」

何人いるだろう　　10人前後だろうか

死を覚悟した



雪が目の前に見えた

時がとまったかのようにみえた

雪というか 白い粉が中に浮かんでいた

目で見える

動かない

周りにはまだ武装した男達がいる

手をみてみた

気づかなかったが、さっき打たれた家庭教師の血が残っていた

これは・・・・・・？

無意識に手に力をこめる

刃となる

無意識に男の方へ投げつけた

次の瞬間

「ぐあつあつ!!?」

男の首の迷彩服に血の固まった刃が刺さっていた  
食い込んでいる

そこから出る血を千里は固め、他の男に投げつけた

同じだ

固めて投げるまで、時がとまったようになる

作って投げるまで、時間がある

これは・・・なんだろう・・・

そう思っていると、まわりには倒れこんでいる男達が全員横たわっていた

千里はこの日、家出をした

親が帰ってくると、そこには荒れた家と死体がゴロゴロと転がっていた

この日の事は新聞やニュースには取り上げられなかった

## 笹川大和 1

1982年9月15日

ササガウ ヤマト  
笹川大和は生まれた

小さい頃からよく動き、よく食べ、体格の良い少年となっていた

大和がまだ小さい頃にみたある番組が心に残っていた

それは人と人が殴りあう、ボクシング

幼い大和にとって、ボクシングは憧れるスポーツとなった

大和が小学校にはいると、身長はかなり大きくなっていた  
運動神経はよかった方で、体育の時間を楽しみにしていた

小学校3年生の頃、将来の夢を考えた

まず、第一にあがったのは ボクシング選手 だった

それから大和はボクシングについてもう一度考えた

大和はボクシング選手になることを決めた

本格的な練習とは言わないが、親から誕生日プレゼントに

サンドバッグを買ってもらい、それを庭に設置して毎日練習した

小学校6年生の秋だった

学校の友達と喧嘩をした時だった

友達4人と、大和

大和は友達4人から、ペンを貸してといわれ、

「もってない」  
と答えた

しかし、友達4人は、大和が筆箱を確認もせず、机も確認しないことから、  
適当に答えているんじゃないか と思い、  
無理矢理大和の机をのぞきこんだ

大和はかつてにのぞかれた事に文句を言った  
友達4人も文句を言い返した      そこから友達4人は、  
（こちらは4人なんだし、大和が手をだすはずはない）  
と、思っていた

しかし、大和はそんな事はお構いなしだった  
自分が不利だろうとそんなの関係なかった

友達の一人が大和の首元をつかもうとした  
その時、彼の腹に大和のパンチがはいる

速かった      そのパンチはまるで ボクサー並だった

後ろにまわっていたもう一人が殴りかかろうとしていた

大和の目のはしに映った相手の伸びる腕

大和は的確に相手の腕の関節に、自分の足のつまさきを当てる  
長さも位置もばっちりだった

彼のパンチをくりだそうとしていた腕は、外側にハジキかえされた

「ぐあっあ」

という喘ぎ声がクラス中に響く

残りの2人は逃げていた

この日以来、大和は喧嘩をして、負けることはなかった

中学校に入学したと同時に、ボクシングジムに入った

大和はこのとき、初めてグローブをはめて試合を試合してみた

相手はボクシング歴10年の相手だった

秒殺

大和はこの時、自分のある 力 に気がついた

そして、この後大和は世界で活躍する一流の選手となる

## 赤木連2

連は自分を 神 だと思っている

小学2年生の少年の考えることは幼稚な事もよくある

しかし、そこから 思い込み が生まれた

連は自分を神と考える その考えイコールは自分の力を信じる事だった

連の才能を信じる・気づいているのだ

連は力を手に入れた が 伸ばすことをしなかった

いや しらなかったし、素質があるかどうかもわからなかった・  
・

1995年5月10日

連はクラスの友達ともよくなったし、それなりに快適な学校生活を送っていた

背は低い方であったが、運動をするのは大好きだった

友達とドッチボールをして楽しんだり、鉄棒をするのも好きだった

ただ、この2年生にあがるまで、 自分の力を使わなかった事が幸運であった

しかし、この2年にあがって、起きてしまった  
自分の力を使  
ったのだ

それは体育の時間、マラソンの練習で、連が走っていると  
クラスですこしいばっている男から靴をふまれ、転んでしまった

それをみた彼は、  
「ごめんよおっ」  
と、態度を悪くして言った

このことに連は 恨み はわかなかったが、不快感を持った

5月14日

また体育の時間に同じ事があった

連はこれはわざとだな と思った

この時初めてわずかだが 恨み が沸いたのだ

沸いた瞬間に連は行動にでた

連はまわりのクラスメイトに気づかれないように石を投げた

石は親指ぐらいの大きさだった

石は彼が次に 踏むであろう 地面に転がった

次の瞬間に彼が石をふみ バランスを大きくかたむいた

ふみどころが悪かったのだろうか

彼は地面に頭をぶつけた

連はやはり 自分は神だ と思ったのと同時に

自分の力に自信をもった

これは後々、連の成長において重要になる

連の先生はあわてて彼を保健室へ連れて行った

体育は中止、次の授業に彼の姿はなく

「 君は病院へいきました . . . . . 」  
と先生のお知らせがあつた

連はこの日、不快感をなくせて、しかも自分の力を確信できた事で  
心地の良い睡眠を得られた



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2987d/>

---

魂の謳歌

2011年1月26日08時35分発行